特別編　坂村真民詩集から

（INDEX）

尊いのは足の裏である	（2017. 7）
あとからくる者のために	（2017. 8）
せいさんだからといつて	（2017. 9）
沈黙	
念ずれば花ひらく	（2017.10）
すべては光る	（2017.11）
本気	（2017.12）
ただそれだけ	（2018. 1）
鳥は飛ばねばならぬ	（2018. 2）
初々しさ	（2018. 3）
アワゴンさんへ	（2018. 4）
夢違観音	（2018. 5）
なにかわたしにでもできることはないか	（2018. 6）
あわもりを飲みながら	（2018. 7）
ねがい	（2018. 8）
おむすび	（2018. 9）
好い日	（2018.10）
やさしいうた	（2018.11）
一致（ユニテ）	（2018.12）
小さなおしえ	（2019. 1）
飯台	（2019. 2）
タンポポの花咲くへんろみち	（2019. 3）
赤い夕日の空へ	（2019. 4）
捨てて捨てて捨て得ないもの	（2019. 5）
アワゴンさんのことばに合わせて	（2019. 6）
体の中の鶴	（2019.12）
茶と詩	（2020. 6）
まなざし	（2020. 9）
自戒ノウタ	（2021. 2）

尊いのは足の裏である

坂村真民

尊いのは
頭でなく
手でなく
足の裏である

子どもの足
一生人に知られず
一生汚い処ところと接し
黙々として
その努めを果たしてゆく
足の裏が教えるもの
しんみんよ
足の裏的な仕事をし
足の裏的な人間になれ

（随筆集「念ずれば花ひらく」から）

あとから来る者のために

坂村真民

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために苦労をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる

あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
なにかをしてゆくのだ

（詩集「詩国」第1集から）

せいさんだからといつて

坂村真民

せいさんだからといつて
めをつぶってはならない
あつぱくされるからといって
だまっていてはならない
みるべきものはみ
いうべきことはいい
せかいのすみずみに
よびかけねばならない
ぜんじんるいに
うつたえねばならない
ひろしまのいかりを
かなしみを
なげきを

（自選・坂村真民詩集から）

沈黙

坂村真民

沈黙は
現代最大の罪悪だ

耳に手をあてるな
目に覆いをするな
心のふたをとれ

そしてつねに

ヒロシマのドームに
耳を目を心を
押しつけ結びつけ
自分を社会を世界を
見直し考え直し
こえを合せて叫べ

そこからはじめて正しい力がでてくるだろう
地球上にかつてない混乱が
到来しようとするとき

沈黙は
人間最大の罪悪だ

（自選・坂村真民詩集から）

念ずれば花ひらく

坂村真民

　念ずれば
　花ひらく

苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになつた
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていつた

（自選・坂村真民詩集から）

すべては光る

坂村真民

光る
光る
すべては
光る
光らないものは
ひとつとしてない
みずから
光らないものは
他から
光をうけて
光る

（坂村真民・詩集「朴」から）

本気

坂村真民

本気になると
世界が変わってくる
自分が変わってくる

　変わってこなかったら
　まだ本気になってない証拠だ

本気な恋
本気な仕事

　ああ
　人間一度

こいつを
つかまんことには

（坂村真民・随筆集「念ずれば花ひらく」から）

ただそれだけ

坂村真民

宗教臭い人間になったら
もうおしまいだ
仏教臭い人間になったら
もうおしまいだ
詩人臭い人間になったら
もうおしまいだ
人を救うんだ
人を助けるんだ
そういうことを
口にする人間になったら
もうおしまいだ
花咲き
花散り
ただそれだけ
それでいいのだ

ただ黙っていても
心が結ばれてゆく
そういう人間にならなければならぬ

（坂村真民記念館「真民さんの日めくりカレンダー」から）

鳥は飛ばねばならぬ

坂村真民

鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ
怒涛の海を
飛びゆく鳥のように
混沌の世を
生きねばならぬ
鳥は本能的に
暗黒を突破すれば

光明の島に着くことを知っている
そのように人も
一寸先は闇ではなく
光であることを知らねばならぬ
新しい年を迎えた日の朝
わたしに与えられた命題
鳥は飛ばねばならぬ
人は生きねばならぬ

（随筆集「念ずれば花ひらく」から）

初々しさ
坂村真民

初咲きの花の
初々しさ
この一番大切なものを
失ってしまった
わが心の悲しさ
年々歳々花は咲き
年々歳々嘆きを重ね
ことしも初咲きの
花に見入る

（坂村真民記念館「真民さんの日めくりカレンダー」から）

アワゴンさんへ
坂村真民

それは一九六一年も
暮れようとするころであつた

愛媛県宇和島市妙典寺前
タンポポ堂殿

伊江島という一通の手紙がとどいた。
美しい南海魚の切手がはつてある
ふしぎに思つて裏をみると

　沖縄県国頭郡伊江村
　阿波根昌鴻

と書いてある

沖縄には一人の友もないのに
どうしてこんな手紙がきたのであろう
中をひらいてみてもわからなかった

そのうち年も明け幾月かたつうち
アワネではなく
アワゴンと読むことや
伊江島という処が
どんな悲惨な島であるか
またアワゴンさんと私とをつないでくれたのは
私の書いた地球儀という文だつたことが
しだいにわかつてきた

アワゴンさんは訴える

　砂糖きびを刈つている者は
　刈つている姿のままに

　水汲みに行つた者は
　桶をかついだままに

　草を運んでいた者は
　草をかついだままに
　死んでいましたと

わたしはかつて霊峰富士に打ち込む
米自走砲の試射弾に

烈しい怒りをぶちまけた詩を
作つたことがあるが
アワゴンさんの訴えを読んでいると
その時にもまして強い憤りを感じた

霊峰富士といつても山である
だがこれは生きている人間への直射弾だ

アワゴンさんの言葉は続く

　Eは即死しました
　二十八才の若さで
　赤ん坊をのこして
　手首と足首とが吹つとんでいました

　Gも即死でした
　盲目の父と
　五人の子を残して
　左足ははねとび
　左手は附根から
　なくなつていました
　二人とも農耕中でした

アワゴンさんの訴えのしずけさは
長い間の苦しみに耐えてきた人だけが持つ
ふかい迫真性をもつている
わたしもまたスローガン的な言葉はやめよう

どうすればよいかすぐにはわからないが
わたしは稲妻のひらめく夜空を仰ぎながら祈つた
祈つたとて何の力にもならないとわかつていても
わたしはこの気持だけでも伝えたかつた

飛びゆく鳥よ
この詩をアワゴンさんにとどけてくれ

（自選・坂村真民詩集から）

ゆめたがえかんのん

夢違観音

坂村真民

いつのころから
この観音に
こうも心をこめて
手をあわすようになったのであろうか

亡き母のさびしい夢を
あまりに度々見るからであろうか

食えない苦しい人々の夢を
あまりに屢々見るからであろうか

再び戦争への悪夢を繰返さぬよう
ひたすら希こいねがうようになったからであろうか

せつないまでに愛と美にあふれた
この可憐な観音のおん前に
あしたゆうべに私は祈る

（自選・坂村真民詩集 から）

なにかわたしにでも
できることはないか

坂村真民

〝なにかわたしにでも
できることはないか〟

せいけ なおこ

清家直子さんは
ある日考えた

彼女は全身関節炎で
もう十年以上寝たきり
医者からも見放され
自分も自分を見捨てていた
その清家さんが
ある日ふと
そう考えたのである

彼女は天啓のように
点字のことを思いつき
新聞社に問うてみた
新聞社からわたしの名を知らされ
それから交友が始まつた

彼女は左手の親指が少しきくだけ
ここで点筆をくくりつけてもらい
一点一点打つていつた
それから人差指が少しきき出し
右手の指もいくらかづつ動くようになり
くくりつけなくても字が書けるようになり
一冊一冊と点訳書ができあがり
今では百冊を越える立派な点字本が
光を失つた人たちに光を与えている

〝なにかわたしにでも
できることはないか〟

みんながそう考えたら
きつと何かが与えられ
必ずひろい世界がひらけてくる
年中光の射さない部屋に
一人寝ていた彼女に
手紙がくるようになり
訪ねてくる人ができ
寝返りさえできなかつたのに
ベッドに起きあがれるようになり
あつたかい日はころころころがつて

座敷まで出ることができるようになり
ある日わたしが訪ねた折などは
日の当たるところでお母さんに
髪を洗つてもらつていた

どんな小さなことでもいい

　〝なにかじぶんにでも
　　できることはないか〟と
一億の人がみなそう考え
十億の人がみなそう思い奉仕をしたら
地球はもつともつと美しくなるだろう
片隅に光る清家直子さん！

（自選・坂村真民詩集　から）

あわもりを飲みながら

坂村真民

しんみんさん
沖縄では
蛇皮線を床において
国の栄えをうたうのです
民の幸せをいのるのです
内地で刀を床において
武門のほこりとしているのと
全くちがうのです
そう心をこめて話をして下さる
この国の人よ
あわもりを飲みながら
わたしはもう長い間の
交わりのような
しん味の熱いものが
胸の底からこみあげてくるのであった

（詩集・詩国第一集　から）

ねがい

坂村真民

あなたに合わせる手を
だれにも合わせるまで
愛の心をお与えください
どんなに私を苦しめる人をも
すべてをゆるすまで
広い心をお授けください

（真民さんの日めくりカレンダー　から）

おむすび

坂村真民

たきたてのごはんの
おむすびのうまさ
ひとつぶひとつぶが
ひかりかがやいて
こころやさしいひとの
りょうてで
かたくもなく
やわらかくもなく
うっすらしおけをふくんで
にぎられた
おむすびの
おいしさ
むすびあうという
そのことばのよさ

（真民さんの日めくりカレンダー　から）

好い日

坂村真民

いい映画を観た
かたわらの妻も泣いていた
私もこんなに感動したことは近頃なかつた
あんなに涙を流したことも珍しいことだつた
人間が一人前になつてゆくには
こんなにもつゝ放され
はずかしめられ
くるしまねばならないか
そしてその苦しみを支えてくれるものは
なんであるか
愛の偉大さのなかにのみ
花がひらき
実をむすぶ
その美しい物語は
家のなかで泣きあうことも
なくなってしまつた私たちを
まつたく一つ心にして
ふたたび結ばせてくれた

外に出ると
小雨が降つていたが
それさえしつとりと
気持ちよく受け入れられる
あたたかい心になつていた

（自選　坂村真民詩集 から）

やさしいうた

立ちあがるアフリカに

坂村真民

黒い父よ
黒い母よ

わたしは呼びかける
やさしい月に
ながかつた君たちの悲しみを

黒い若者よ
黒い乙女よ
わたしはほゝえみかける
やさしい花に
立ちあがろうとする君たちの願いを

黒い子らよ
未来の天使たちよ
わたしは祈りつゞける
やさしい神に
ひらかれてゆく君たちの幸せを

（自選　坂村真民詩集 から）

ユニテ
一致
　　坂村真民

ユニテ
一致こそわが願い
平和こそわが祈り
友よ
この悲願を
広めてゆこう
手をとりあって
この道を
進んでゆこう

　　わたしが
　　ねがうのは
　　ユニテ(一致)
　　どんなに

ちがったものでも
どこかで
一致するものがある
それを見出し
お互い
手を握り合おう

（随筆集　「念ずれば花ひらく」から）

小さなおしえ

坂村真民

見知らぬ人でもいい
雨に濡れていたら
こうろぎ走つて行つて
傘に入れておやり

バスから降りるときは
疲れた車掌さんに
ありがとうと言つておやり

道ですれちがう
おばあさんたちには
ここえであの世での
幸せを祈つておやり

目の見えない人が歩いていたら
おつ母さんになつたつもりで
手をひいておやり

ねがえりもできず
ねている人があつたら
こおろぎのように
そつと片隅で
愛のうたを
うたつておやり

小さなことでいいのです
あなたのむねのともしびを
相手の人にうつしておやり

（自選　坂村真民詩集 から）

飯台

坂村真民

何もかも生活のやり直しだ
引揚げて五年目やつと飯台を買つた
飯台あしたの御飯はおいしいねと
よろこんでねむつた子供たちよ
はや目をさまして珍しそうに楽しそうに
御飯もまだできないのに
自分たちの座る処を母親にきいている
私から左廻りして梨恵子佐代子妻
真美子の順である
温かいおつゆが匂つている
おいしくつかつたたくあんづけがある
子供たちはもう箸をならべている
あゝ飯台一つ買つたことが
こうも嬉しいのか
貧しいながらも貧しいなりに
ふとつてゆく子の涙ぐましいまで
いじらしいながめである

（自選　坂村真民詩集 から）

タンポポの花咲く
へんろみち

坂村真民

春になると
八十八ヶ所の
へんろみちに
タンポポタンポポが
一時に花をつけ
旅ゆく人に
呼びかける

明るい心で生きて下さい
どんなつらいことでも耐えていって下さい
わたしをごらん
ふまれても食いちぎられても
しっかと大地に根をおろしています
念ずれば必ず花ひらくみ仏の教えを
しっかと胸に刻んで巡礼を続けて下さい
明日もお天気です

（坂村真民　　詩集　朴 から）

赤い夕日の空へ
坂村真民

かつて仏海寺山麓の
独居房で
寒暑に耐えて
打座詩作三昧であった折
諸仏諸菩薩の中に交って
礼拝していた写真が
一つあった
それはホー・チ・ミン伯父さんと
呼ぶものであった
夕日2朴の木が好きで
朴の花が好きで
朴の材の作品が好きで

ホー　ホーと
礼拝してしたのである
きのうある夫人から
しんみん先生
あなたをニッポンの
ホー・チ・ミンと呼ぼうか
ホー伯父さんと呼ぼうか
どうも写真がよく似ていますとあって
わたしをホー・シンミンさんと
呼んでくれる
第一号が現れたのが
うれしかった
わたしはホー・シンミン先生と
しるしてある手紙を握って
川土堤へ行き
大声で叫んだ
ホー伯父さん
頑張って下さい
正義は必ず勝ちます
この声をきいて下さいと
その時赤い夕日の空へ
こん ぴら　　ごんげん　　いんいん
金毘羅大権現の鐘が殷々と
鳴りひびいたのであった

（坂村真民　　詩集　朴 から）

捨てて捨てて
捨て得ないもの
坂村真民

捨てて捨てて
捨て得ないもの
それは一遍上人にとっては

一遍上人ナムアミダブツであり
わたしにとっては
詩であり
母にとっては
遺された五人の
幼な子であった

捨てて捨てて
捨て得ないもの
それには人それぞれのものがあろう
でもあくまでそれは
財産でもなく
名誉でもなく
他のためにつくす
無償の愛でありたい

かつてない狂乱の時代に生れきて
静かに一隅にあって
花を愛めで
捨てて捨てて
捨て得ないものを
わたしは今日も
乞い願う

（詩集 詩国 第一集 から）

アワゴンさんのことばに合わせて

坂村真民

アワゴンさんは言う
かね
金はいっとき
土地は万年と
阿波根さんわたしは言う
命はいっとき
まことの詩は万年と

アワゴンさんもわたしも
ガンジーが好きで
それで結ばれたといってよい
アワゴンさん頑張ってください
—阿波根さんは沖縄伊江島土地を
守る会の代表者

（詩集　朴（新装版）から）

体の中の鶴
坂村真民

わたしの体の中には
一羽の鶴が宿っている
孤独になれば慰めてくれ
不遇になれば励ましてくれ
蹉跌すれば救つてくれる
不思議な鶴である
鶴時にはひどくよごれ
羽根もぼろぼろになることもあるが
天に向つて飛び立とうとする気概は
一度も失つたことがない
考えてみるとこのような鶴は
母の体のなかにもいたようだ
きつと母がわたしを孕んだとき
その血をわけてくれたのであろう
孤独ではあるが孤立はしない
和しはするが同じはしない
わたしの体のなかの鶴よ
わたしはお前と共に生き
おまえと共に老いてゆこう
わたしの鶴よ
大事な鶴よ

（自選 坂村真民詩集 から）

茶と詩

柳田静江さんに

坂村真民

心かなしむ人のために
心すさびた人のために
心からおいしく飲んでもらう
一服のお茶を
進ぜられるようになりたい
そうあなたは言われる

お茶
心くるしむ人のために
心きづついた人のために
心からうれしく読んでもらう
一編の詩を
作り得るようになりたい
そうわたしは答える

そのたび私たちを結んでくれるのは
東洋に伝わる
深い慈愛の教えであった

（自選　坂村真民詩集）

まなざし

坂村真民

まなざしを
変えない限り
戦争は起こり
平和は来ない

安倍総理
憎しみの心を
捨てない限り

争いは絶えなく
幸せは来ない

無差別平等の
宇宙のまなざしを持つ
新しい人間の
出現を祈ろう

自戒ノウタ
　　坂村真民

小サナ家ニイテモ
ココロ貧シクナルナ
マズイモノヲ食ツテイテモ
物欲シクナルナ
一本の木耐エガタイコトガアツタラ
一本ノ木ヲ見ツメテ勇気ヲ出セ
生命ヲツカムタメニハ
素直ニナラナケレバナラヌ
アセラズ
クニセズ
シズカニ
ジブンノ道ヲ
マツスグニ行ケ

（自選 坂村真民詩集 から）